

説教 「神の器は壊される」 山本 護 牧師

聖書 イザヤ書40：3～5／ルカによる福音書1：76～77

イエスの降誕物語に伴走するように描かれている洗礼者ヨハネの誕生譚。ヨハネの父はエルサレム神殿の祭司ザカリア(ルカ1:5)。ザカリアは聖霊に満たされ、生まれた我が息子ヨハネを前に預言した。

「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる(1:76)」。ヨハネは、長じてからその役割を担う(3:16)。

降誕に際し、天使が四者に現れて「恐れるな」と告げた。イエスの養父となるヨセフに(マタイ1:20)、母マリアに(ルカ1:30)、野宿していた羊飼いらに(2:10)、そして祭司ザカリアに(1:13)。

降誕は、一人の嬰兒に、神の圧倒的な力が現われる出来事。それに関わる者には「恐れ=畏れ」が生じ、尻込みさせてしまう。だから天使は「恐れるな」とはっきり命じて、閉じかけた心の扉をグイッとこじ開ける。

なかでもザカリアの変化は印象的だ。まず口を封じられた沈黙がある(1:20~22)。次に、ヨハネの名を示すと口が開いて神を讃美する(1:63~64)。そして聖霊に満たされ、イエスの道備えをする我が息子の役割を預言する(1:76~77)。

「言葉」に関連したザカリアの劇的な変化は、何を意味しているのか。

古代中国の陰陽体系は、自然や心身を把握する上で統合的で、漢方や経絡などは有用で实际的だ。この思惟には「陰極まって陽と成る」と表現がある。

たとえば、渋柿の陰(収縮)が極まると、干柿のように甘く(弛緩)なるという変容。この陰陽のイメージを借りて、ザカリアの変化を眺めてみよう。

「できないことは何一つない(1:37)」神の圧倒的な力を前に、ザカリアは沈黙するより他なかった。そしてその沈黙が「極まった」ところで、天使から告げられた名(1:13)を示す(1:65)。すると陰は極まって陽となり、「たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた(1:64)」。

人間の思いから神の力へ向き直った彼は、何を讃美したのか。「陽極まって」聖霊に満たされ、「(我が息子は)主に先だって行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせる(1:76~77)」と預言した。

祭司ザカリアは「馴染んだ神」の律法で生きていた。ゆえに神の力も、信仰の希望も、人間の想定内に納まっていた。ところが神の力は想定される「神の器」を打ち壊し、ザカリアは沈黙させられた。

これは私たちにおいても起こる。神は、教会や教義という限定された器に納まっていないからだ。私たちもまた沈黙するより他ない。そして沈黙が極まったところに、神への讃美が起こる(1:64)。

神を讃美するとは、私たちの「口」や「行い」が聖霊のものとなること。「聖霊に満たされる(1:67)」とは憑依現象ではない。

「同様に、”霊”も弱いわたしたちを助けてくださる。わたしたちはどう祈るべきか知らないが、”霊”自らが言葉に表せないうめきをもって執り成してくくださる(マ7:26)」。

讃美とは、神の力を理解したことの表明ではない。聖霊に助けられる私自身の変化が讃美。神の圧倒的な恵みを前にし、自分の小賢しさを思い知らされ、沈黙させられ、解き放たれる変化自体が讃美なのだ。

イエスよりも半年早く生まれたヨハネは、「主に先だって行き、その道を整える(ルカ1:76)」者。彼は超禁欲的な洗礼者となるが、自らの権威を手放し「いと高き方の預言者(1:76)」に徹した。

ヨハネは父の祭司職を継がず、荒野で育った(1:80)。ザカリアは、この期待外れの命運をも讃美したのであろう。



《おまけのひとこと》

神の器は 人間がこしらえたもの 彼らの期待に応えて 神がちんまり納まっているはずがない
神の器は 思い描かれたイメージ 降誕はその被膜の外へ突き抜け 破れ目からは霊が吹きこむ